

# 野菜

## 【アスパラガス管理】

### 1 茎枯病対策(立茎期)

露地作型の出荷も本格的に始まりました。半促成作型ではそろそろ収穫を打ち切り、立茎を始める時期になります。日収穫量や気候等を考慮して、貯蔵根の養分蓄積量に余力があるうちに立茎することが基本です。また、立茎初期の茎が柔らかい時期が茎枯病菌に最も感染しやすい危険な時期です。まず、雨が降らない時期を選んで立茎を開始します。

茎枯病は、「畝面の残さの片づけ+土盛り(有機物マルチ)+薬剤散布+雨除け」等の作業を組み合わせることでさらに発生の軽減につながります。

立茎の標準的な手順は、①伝染源となる畝面の残茎等の残さを畑の外に持ち出して処分 ②通路の土を畝面に盛り上げて畝表面を隠す(ハウスが設置してあり通路に管理機が入れない場合には切りワラや堆肥で畝面を被覆する\*) ③若茎が3~5cm程度に伸長したら茎枯病に登録のある薬剤を散布し、5日以上間隔を空けずに続けて薬剤散布する(合計3回)。

※ 通路の土が硬い等の管理機で盛り土ができない場合には、堆肥や切りワラによる「有機物マルチ」が効果的です。畝の表面と切り残し等の残茎を完全に被覆する(埋める)ことが重要なので、畝面に3~5cm程度盛り上げます。



写真1 畝面の残茎の片づけ

伝染源を除去。伝染源を残しておくと、薬剤散布の効果が著しく下がります。



写真2 畝面への土盛り処理



写真3 切りワラによる有機物マルチ  
マルチが泥はねを防ぎ、病害発生を抑制します。



写真4 防除開始適期の目安  
薬剤散布は若茎が3~5cm程度萌芽してきたら開始します。

## 1 マルチ被覆

地温の低い時期のトマトやピーマン等果菜類のマルチ栽培が基本です。マルチは土壌が適湿な状態で張り、ハウス内の乾燥時にはたっぷりかん水した後にしばらく土を落ち着かせてからマルチを張るようにします。

地温確保のためには、マルチは1週間前までに張り終わるようにしましょう。地温の上昇効果は、透明マルチ>グリーンマルチ>黒マルチ>白(銀)マルチの順と異なります。なお、透明やグリーンマルチの地温は上昇しますが、光を通すためにマルチ内の雑草が生えやすい傾向があります。



写真5  
グリーンマルチに定植直後のキュウリ

## 2 定植

露地栽培では無風で暖かい日の午前中に行うのが理想的です。定植前に植え穴にたっぷりかん水し、土を良く湿らせてから定植します。育苗ポット培土の表面がマルチ面と平らになるか、少し上に出る程度の浅植えが基本です。深植えは活着の遅れや、接ぎ木苗で接木部分が生土中になると穂木から自根が発生する場合などもあります。また、風で揺さぶられると接木部の折れ、根が切れやすいので支柱等に固定します。保温のため保温キャップやあんどん等を設置すると良いでしょう。定植後のかん水はできれば午前中に行い、午後のかん水は根を冷やし病害発生にも繋がるので避けましょう。アブラムシ類やアザミウマ類の早期被害を防ぐには、定植時の粒剤処理が有効ですので、使用時に必ずラベルを確認して表示どおりに使用してください。

## 【葉菜類の管理】

### 1 定植

レタスはやや浅植えとし、極端な深植えや斜め植えは変形球の原因となります。セル成形苗は強く押し付ける必要はありませんが、根鉢が床土に密着するようにしましょう。

露地パセリーは定植時の植え痛みを減らすために定植前に十分かん水を行い、根土ごと苗取りします。生長点に土を入れないように植え、株元かん水します。

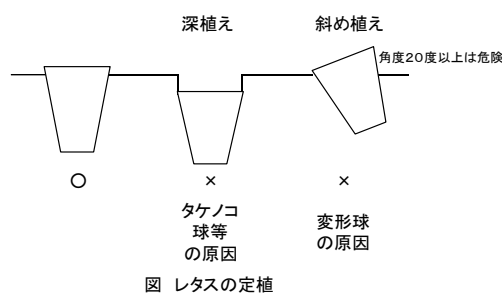


図 レタスの定植

## 【凍霜害対策】

日中の気温は徐々に高くなりますが、上空に寒気が流れ込むと遅霜が心配されます。天気予報等で、気温が下がると予測される期間の定植は避けましょう。また、凍霜害防止、生育促進のため、被覆資材による「べたがけ」被覆を行いましょ。被覆資材は風で飛ばないようにマルチステッキや土等でしっかり押さえます。

なお、アスパラガスが凍霜害を受けた場合、速やかに被害茎を根元から刈取って、次の萌芽を促します。